

「世界を舞台に活躍する人材の育成と、『楽しい』『喜び』に満ちた社会の創造」に関する主な意見

1 世界で活躍する人材の育成

○ 現状・課題

- ・ 日本人全般、子供たちだけでなく、若い大人の人たちも英語に対する自信があまりないと言われている。中学生、高校生ともに社会での英語の必要性はほとんどないと答えている子は少ないが、自分自身が使っているイメージはない。社会では必要だが、自分はほっておいてほしいという印象が非常に強い。
- ・ 英語教育実施状況調査の結果からは、英検3級程度のレベルにある中学生が学んでいる学校はどのような学校かということ、小中の連携がうまく実施されている、先生自身が英語を使って授業を行っている割合が非常に高い、1時間の75%以上は英語で授業をやっている、授業の大半を生徒の言語活動に使っている、話したり書いたりする能力を伸ばせるシステムを持っている学校であることがわかる。
- ・ ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）のCレベルになると、グローバルを超えた、人類として扱っていかねばいけないテーマについて、ちゃんと議論できるような人が必要だが、残念ながら、日本の中ではまだまだ少ない。
- ・ 千葉県は成田空港を持っており、首都圏の一翼を担っているので、国際化対応では日本の先陣を切っていてほしい。そのためには国際理解ということと、自分の国、郷土に対する学習にしっかり取り組む県になってほしい。つまり、国際理解教育と自国の歴史学習、郷土学習の充実を「千葉県教育の目指す姿」にしてほしい。

○ 郷土の歴史と伝統文化等の学び

- ・ 国立歴史民俗博物館は、千葉県内にある唯一の国立の博物館であり、しかも歴史系の博物館であるという特色を是非うまく活用していただくことが重要ではないか。
- ・ 日本で特に求められている「グローバルな人材」育成という面では、日本の歴史と文化について外国の方にきちんと語ることができるかどうか、非常に重要な能力である。
- ・ 千葉県は、少なくとも19世紀までは確実に「文化的な先進地」だった。博物館・文書館・図書館に実物資料や豊かな資料情報が蓄積されている。それは、全体の量からいうと、ほんのごく一部でしかないが、その多くは地域社会で継承されてきたものである。こうした歴史資料・情報から、何を学ぶことができるのか考えることはきわめて大切である。

- ・ 150年前の千葉県、上総・下総・安房地域はどのような地域だったのか。これを県民がどの程度理解しているのという点から本当は考えてみななければいけない。自分たちが持っている歴史文化資源（遺産）の価値を考えるうえでは、自分たちの歴史文化をちゃんと学ぶというところからやらなければいけない。
- ・ 生身の人間と対話すると、関係が対等であったり、目上であれば使う言葉は違ってくる。日本語のボキャブラリーは非常に多い。謙譲語や尊敬語など、敬語がたくさんあるからである。この敬語を持っているということが、日本人の心、文化、伝統につながっていくのではないか。一つの言葉を状況によって選んで使うことが、やはり必要なのではないのか。
- ・ 今、私たちが過ごしている環境は新暦であり、明治期に西洋にならってシフトしたものである。すると、それまでの日本の伝統、二十四節気や四季を通じたいろいろな季語などが今の季節感と合わない。ややこしくて、わかりにくい。だから、国語の古文が嫌いになっちゃってしまう。季節感や旧暦の感覚を養う教育は絶対必要である。
- ・ 外国にあこがれるのもいいが、まずは自分の国、文化のことを語れないと、外国のことはわからないという姿勢を大切にしていくのも1つではないか。
- ・ 日本は八百万の神を信仰している。神様は無限大でいる、自分はこの地球の中で生かされている。これは日本のすばらしい考え方である。自然は非常におそろしいが、たくさんの恵みをもたらしてくれるから、うまく共存共栄していこうと。実体はなくても、見えないものを想像して感じる力が本来あった。日本が国際社会でこれから果たしていく役割は、こういうところではないか。記憶喪失になっているアイデンティティをもう一回目覚めさせなければいけない。
- ・ 千葉県や郷土の歴史や地理、偉人について学ぶ郷土学習に、小学生の時から今まで以上に徹底して取り組んでほしい。特に、自分の学校について学ぶ自校教育に取り組むことで、自分の通う学校に愛着をもって学校生活を送ってほしい。
- ・ 地域の歴史や文化、そして先人の活躍を学ぶことが、千葉県への愛着や誇りにつながる。千葉で暮らし、千葉の良いところを知ること、子供たちは千葉に愛着を持ち、そして、地域に住む人たちの誇りにつながっていく。
- ・ 地域住民が地域の歴史や文化資料の価値を正しく理解するためには、子供の頃から「地域の歴史を自ら学ぶ」ことが大変重要である。子供と一緒に学区を歩いて、学区の歴史を学ぶ学習に取り組んでほしい。
- ・ 今年、中国・四国地方でおこった水害も、東日本大震災のときの津波も、それぞれの地域に過去に同様の被害を受けたことを示す史料が残されている。地域を襲った災害の歴史を学ぶことの大切さがわかる。学校と地域社会との連携を大切に、その連携を実現するためには、学区の歴史を学ぶことから始める必要がある。

- ・ 郷土学習、故郷学習は、一番重視すべきものの一つだと思う。自分の学校の歴史を学ぶ自校教育も、学区を学ぶ学習につながる。郷土の先哲などについて学ぶ学習も、併せてやってほしい。

○ グローバル人材

- ・ 英語も大切だが、母国語の日本語教育も大切である。流暢に話すことができても中身が空っぽではいけない。国のことや、もっとグローバルなことを語るためには、語学力以前に、それを構築する力を持たなければならない。
- ・ 今の日本の向かっている方向は、母語を大事にする方向ではなくて英語で全てができるようにする方向ではないかと疑っている。母語を大事にするのが一番重要ではないか。
- ・ 日本語教育とは、今、日本でやっている英語教育と似た立場にあつて、外国人に日本語を教えることで日本語というコミュニケーションツールを使って日本のことを知る、つまり、コミュニケーションを通して相手を理解するための道具にするということである。しかし、国語教育は、自分のアイデンティティそのものがそこにある。
- ・ カナダで日本語を教える時に言われたことは、言葉を教えるだけではなくて胃袋をつかみなさいと。胃袋というのは、例えば日本の和食を食べさせて、一緒に文化も吸収させるという意味である。ただ言葉を知識として教えるだけでなく、その周りにある文化も一緒に継承しなければ長続きはしない。
- ・ 日本を離れたところから、日本あるいは日本の教育をみるという視点が非常に大事である。
- ・ 道具としての語学力を養成しながら、次世代の日本人のアイデンティティと誇りをさらに育成するために、新しい学びの再構築が必要だ。
- ・ 日本の若者を見ていて心配なのは、特に自尊心が低いことである。自国への愛国心がない国民は、海外からも尊敬されないと思う。日本の良いところ、あるいは日本人の良いところをしっかりと子供たちにも理解してもらい、それを絶対的に理想化するのではなく、他国や他文化と比較して相対的に理解することが必要である。
- ・ 国際化・グローバル化が進み、訪日の外国人が 3,000 万、4,000 万という時代が来ている。外国人が日本に来て働くことも、これからもっと多くなっていく。グローバル社会の中で、日本人として生きていく力というのも、これまで以上に養う必要がある。具体的には、コミュニケーション能力であったり、国際理解であったり、人とつき合える力を身に付けることが大事だと思う。
- ・ これからは日本にも更に多くの外国人労働者が入国してくる。成田空港を有する千葉県は、外国人とコミュニティを形成し、共生する道を模索するなど、グローバル化への対応が急務である。

- ・ 千葉県には成田空港があり、外国人も多いので、外国語教育、コミュニケーション教育を一層充実させることが可能である。例えば、初対面の大人にインタビューをするなどができるのではないか。

○ 外国語教育

- ・ ICTなどを活用して力を伸ばそうとしている高校は、英検準2級レベルの生徒が多い。英検準1級以上の力がある先生に習っている生徒、ALTとうまく協同して授業ができていいる学校の生徒、授業の半分以上を生徒の言語活動に費やしている学校の生徒も伸びている。パフォーマンステストをちゃんとやっているかどうか大きな要因である。また、教師の発話の半分以上が英語で授業が行われている学校の生徒は、実際に英語力が伸びている傾向が見られる。
- ・ より多くの技能を使って統合的に、総合的な授業を行っている先生に習っている生徒ほど、積極的に授業に取り組もうとしている。また、積極的に英語を学ぼうとしているという姿が見える。
- ・ CEFRの基準は、一番下からA1、A2、B1、B2、C1、C2となっていて、全てCan do、何々ができる人材を育成しようという形で、全部、何々ができる、Can doという形で提示されている。学習指導要領がCEFRを取り入れたということは、何々を知っているだけでなく、それを使って何々ができるような生徒を育成しなければいけないということである。
- ・ 今回の学習指導要領では、3つの資質・能力をバランス良く育成しようと言っているが、一番大切なのは、自信がない、外国語は自分は使いたくない、自己肯定感も非常に低いという今の中高生に、どのように自尊心を持たせるか、どのように自信を持たせるのかということである。
- ・ 英語教育の問題も、先生が細かく、個別に生徒とやっているところではうまくできるが、マンツーマンでないやり方でやるとだめなのではないか。語学を教えるのも、語学を学ぶのも、他者に対する共感能力を高めることと通じるところがあるのではないか。
- ・ 小学3、4年生の外国語活動は、活動して英語を使い、コミュニケーションが通じた喜びが子供のモチベーションになるという発想でやっている。5、6年生で教科になった段階では、3、4年生でやってきたものをベースに、あれは何か、何で日本語と違うのということに気づかせ、そこに対して知識を与えていくという、帰納的学習である。中学校から先は、どちらかというと演繹的である。逆の方向からいっているの、そこをつなげるのはものすごく大変である。

○ 外国人児童生徒

- ・ 日本語を母語としない生徒が非常に多くなってきている。定時制高校は多様な生徒の凝縮である。日本語ができる生徒もそうだが、日本語ができない生徒の家庭のことを考えると、かなり大変な状況である。

- 千葉県でも最近外国人が随分増えている。家族で来て小さい子供がいる家庭も多い。千葉市内のある小学校では、中国人の子弟が非常に多く、家庭では中国語を話している子が小学校に入ってきて、まだ小学生ですから日本語が話せない。小学校の先生は非常に困っている。
- クラスの中に外国人が増えた場合、全員に対して同じ評価の基準ではなく、その子に特有の評価基準を設けてもいい。小さな「できた」、昨日までわからなかったことがわかるようになったということで、歩みのスピードや歩幅は違っても、何か意欲を持たせるような評価の基準を立てることが大切である。

2 スポーツの推進

○ 現状・課題

- ・ 中高生のスポーツ権の保障ができなくなっている。小学校で、スポーツ少年団でバスケットボールをやったが、中学校ではその部がなく、スポーツする機会が保障されない子供たちが結構多くいる。同時に、教育問題が非常に複雑化して教員が非常に疲弊している。新しい学校スポーツとか地域スポーツのあり方を検討していく必要がある。
- ・ 中学校の教員のうち、部活動の専門的指導能力が不足していると感じている教員が約4割いる。専門的知識を持った指導者の指導を受けることができる環境がないというのが、今の日本の部活の現状である。

○ 生涯スポーツ

- ・ 少子化が進み、生産人口が減っていく中で、衰退する地域が生まれてくる。これを放置しておく、特に地域や学校で子供のスポーツニーズに対応できない状況になる。
- ・ 部活にも、地域のスポーツクラブにも入っていない女子中学生の6割近くが、好きな、あるいは興味のある運動やスポーツなら入りたいと言っている。つまり、そのような部はないということである。ここでも実はスポーツ権が保障できてないということである。
- ・ 小学校を出た後、運動部活動以外にスポーツを継続できるような機会・環境がない、あるいは少ないのが現実である。また、中学校や高校の部活で先生と合わなかった、あるいは家庭の事情で退部した子供たちの受け皿がない。少子化により、生徒のニーズに応じた部活動自体が成り立たなくなっている現実がある。
- ・ トップアスリートは体にガタがきている人が少なくない。体の状態を考えた時に、持続可能性のある、生涯にわたってスポーツを楽しむような部活を設定していかなければいけない。
- ・ スポーツの在り方が変化してきた。スポーツは自分を成長させるものから、自分が楽しむために自分で準備し、さらに困っている人やうまくできない人のために手を差し伸べる自律的社会貢献型のスポーツへと変化してきた。

○ スポーツ環境の整備

- ・ 生徒のスポーツ権を確保していくには、子供たちがスポーツの目的、オリエンテーション、志向、スキルに応じて、自分たちがやりたいスポーツに親しむことができる環境を整備する必要がある。

- ・ 全国中学生体育大会やインターハイには、教員しか関われないが、スポーツボランティアなどの外部人材をどのように有効に使っていくのか、検討していかなければいけない。
- ・ スポーツ少年団と総合型地域スポーツクラブと運動部活動が融合し、中学校の運動部活動で指導できるようにしたい。また、スポ少と総合型クラブと学校運動部活の役割を明確にしたい。
- ・ 部活に関わる地域の指導者に対する必要な経費を支援する予算を準備しなければいけない。
- ・ 青少年が地域スポーツクラブの運営等に主体的に参画することを促すようなスポーツ教育をやっていかなければいけない。特に国公立大学や私立大学が、教員免許法の中であり方を変えていかなければいけない。また、日本スポーツ協会が、スポーツの指導者育成を一層やっていかなければいけない。
- ・ 大学はCOC（Center of Community）として地域に貢献することが期待されている。地域のスポーツクラブだけでなく、大学も地元の組織や中・高と連携してスポーツ振興にいかにか貢献できるかを考えた方がいい。
- ・ 総合型地域スポーツクラブは、地域住民の健康づくり、介護予防、さらに子育て支援、学校との連携、障害者スポーツについても関わりを持ち、取り組んでいる。地域をつくるツールとして、総合型地域スポーツクラブをもう一度見直す必要がある。
- ・ 単に地域の人たちが総合型地域スポーツクラブに参加するのではなくて、運営に参画してもらうことで、スポーツによる地域づくりが可能になる。

○ 運動部活動

- ・ 全国中学生体育大会やインターハイには、単一の学校から複数チームの参加や、複数校の合同チームを出しているのではないかと。あるいは、一番暑い時期に一番暑い場所で大会を行うことに、本当にやる意味があるのか、もう1回考え直していかなければいけない。
- ・ 中学生年代の大会の再構築をやっていかなければいけない。例えば、総合型地域スポーツクラブと学校の運動部がチームをつくって、大会に出られるようにしなければいけない。また、一つの学校から二つのチームが出てきてもいい。トーナメント制もやめた方がいいのかもしれない。
- ・ 中学校では多くの部員がいても、試合に出られるのはごく一部だから、多くの生徒にチャンスを与えるために複数のチームをつくってもいいとの考えかと思うが、高校ではそういうチャンスが与えられている。例えばサッカーでは、私の高校は3チームを送っている。3チームつくると、ほぼ全員の出番がある。そういうやり方をすれば解決できるのではないかと。

○ 地域の活性化

- ・ スポーツの市場は大きな産業領域であり、日本でも約11～12兆円の経済規模がある、基幹産業の一つである。スポーツツーリズムやスポーツ観光、スポーツコミッションなどに取り組みながら、地域スポーツクラブと学校運動部を融合しながら地域の拠点にしていく必要がある。老人の介護予防のスポーツ教室や、運動教室をやるような地域づくりの拠点に、学校運動部を活性化していく時期に来ているのではないかと。
- ・ 新たな地域スポーツ体制をつくった場合の効果としては、生徒は、中学校や高校の活動を継続でき、学齢による分類から目的に応じた分類でスポーツに接する機会が増える。地域スポーツクラブは、クラブハウスを中学校に確保でき、会員確保による安定経営ができ、自立した組織になっていける。中学校や高校の教員は、ゆとりが生まれ、教育活動の充実に活用できる。また、生徒は地域の様々な年齢や職業の人々と交流する中で、コミュニケーションの大切さを学ぶことができる。

○ 東京オリンピック・パラリンピック

- ・ ロンドンパラリンピック大会の時、招致が決まったのは大会の7年前だが、その時に実際に応援に行ってみたいと言った人たちは1%未満だった。それが、学校教育の中で、オリンピック教育・パラリンピック教育に子供たちが触れて興味を持ち、親を巻き込んでくれた。
- ・ 今、パラリンピックの選手を呼んで、学校で講演をしてもらうこともあるが、ロンドンではその1回だけのイベントではなく、持続した学習が続けられていた。学校でふだん教えている先生が、算数、理科、道徳、体育の時間など、折に触れているいろいろなところでオリンピック・パラリンピックの話題に触れていくと、子供たちが身近に感じることができる。
- ・ 先生方がふだん言っていることには、子供たちも興味を持っていく。学校でたくさん触れれば触れるほど見たくなるという傾向がある。ぜひ学校の先生方に期待をして、どんどんパラリンピック教育をやってほしい。すればするほど、みんな見に行きたくなるので、学校の先生方に期待したい。
- ・ 2020 東京オリンピック・パラリンピックのレガシーとして、ボランティアに参加した人が、継続してボランティア活動に関わる仕組みを作ることを提案する。そのためには、スポーツから始めたボランティアを、災害、福祉、教育、文化などのボランティアへ、その活動領域を往還したり、融合したりできるような組織やコーディネーターを育成する必要がある。

3 伝統文化

○ 現状・課題

- ・ 千葉県だけでなく、全国的に、少子・高齢化は想像を絶するスピードで進んでおり、人口減と地域間格差拡大のなかで、地域社会そのものが大きく衰退し始めている。その中で、地域社会がそれまで作成し、継承してきた貴重でかけがえのない大量の歴史文化資料をどうやって保全するか、全国的レベルでも考えなければいけない。
- ・ 文化的な取組は、千葉県に限らず、全国的に非常に予算が削減されたり、理解があまり得られなかったりというところがある。千葉県も御多分に漏れず、大変難しい環境である。
- ・ 千葉は、非常に潜在能力の高い場所である。歴史的にも非常にいろいろなものが残っていて、伝承されている。ところが知らない。これは大変恥ずかしくて残念なことだ。

○ 文化にふれる環境づくり

- ・ 千葉で催す催しは二落ち、三落ちで、本当に良い、クオリティーの高いものを見るなら東京まで行って見るという方が多い。自分の住んでいるところを大切にしている心がないというのは、大変けしからんことである。そういうところから改革すべきである。
- ・ 日本の伝統文化に、もっと小さいころから触れる環境づくりをして、そういうものが当たり前身近にあるということがまず大切である。子供たちに本物に触れさせることが大切である。
- ・ 学校の先生自体が伝統芸能文化に対しての造詣が浅過ぎると感じる人が多い。例えば、小学校に派遣事業で何うと、「狂言は難しいので6年生だけ限定にした」と言われる。一生に一度しか見ないかもしれない、プロが来ている時に、自分がものを知らずに、低学年の子供には難し過ぎるなどということによって機会を奪ってしまう。これは大変残念なことである。
- ・ 学生だけではなく、教職員、親にも、伝統芸能文化に触れる機会を県でつくっていくことが、まずは大切なことではないか。
- ・ 伝統芸能の問題も、自分で直接に知ることが非常に重要ではないか。小学校低学年の子供の場合は、十分に理解できなくても共感することはできる。
- ・ 今の子供たちは映像を見て育っており、実際に生で、目の前で何かが繰り広げられるというものに触れる機会が少ない。やはり生のものは予測不可能なわけで、それによって、創造力を養えるのではないか。

- ・ 日本の伝統文化は簡素美、無駄なものを省く。そうすると何も無いところで体や声を使って表現をする。見ている人は想像して楽しむ。全部がバーチャルリアリティーで見えるのではなく、何も無いところで、自分の頭の中で想像を膨らまして感じる教育が大切なのではないか。
- ・ ちば文化資産については、大いにピーアールしてもらいたい。観光とも連携し、千葉県民の誇りになると思う。

○ 文化財の保存・継承

- ・ いつ大震災が起こっても不思議ではない。そういう時に自然・歴史・文化遺産をどのように守るかを日常的に考えることは重要である。
- ・ 千葉県史編さん事業で実施した調査・研究の成果は、現在千葉県文書館にある。こうした編さん事業の成果をどのように生かしていくか、将来世代にどのように利用してもらうかが非常に重要である。
- ・ 「歴史・文化の先進地としての千葉」から何を学ぶことができるのかが本当は重要で、「千葉ならでは」ということの一つは、千葉県が持っている独自の歴史文化遺産をどのように活用するか、とても重要なことである。
- ・ 千葉県の博物館は、これから統廃合が進む可能性はあるが、それでもやはり質の高いものを持っている。これをどう活用するか。千葉県文書館には16年間におよぶ千葉県史編さん事業の成果がおさめられている。これをどう活用するか。そして、中央図書館のような施設やそこに収蔵されている書籍や史料、情報などをどう使うかは、きわめて重要である。
- ・ 豊かな歴史文化遺産を持っているだけでは何の意味もない。今後、地域社会が衰退し、解体することは避けられとすると、無くなっていくもの少なくない。あと20年もつかどうかさえわからない。しかし、今なら何とかできるかもしれない。「教育立県ちば」を真剣に考えるときには、こういう点も必要である。
- ・ 一番大事なことは、先生が自ら興味を持って、子供たちに伝えなければいけないような学区に伝わる伝承、歴史を大事にするところから始める必要があるということである。
- ・ 地域の自然、歴史、文化資料を次世代へ残すためには、その価値をきちんと理解できる住民を増やすことが大切である。そのためには、学校が、文化的な拠点となり、地域住民と学区の歴史を共有できる環境をつくる必要がある。
- ・ 千葉県が全国に先駆けて、自然・歴史・文化資源を全県レベルで把握し、記録し、活用しながら保全する、長期的で具体的な行動計画、ロードマップの作成に取り組んでほしい。

- 千葉県が、地域の芸能や民俗文化財を保存し、伝えていく努力をしていることはよく理解しているが、学区の歴史を共有し、学区の中にある文化財、後世に伝えるべき地域住民が自ら自分たちの文化財を発見するところから始めるような道筋についても考えてほしい。